

札幌大学総合論叢  
第八号（一九九九年十月）

△創作△

—交声詩 らうす—

# 「親潮のくに」

原  
子

修

(一  
六七)

## 序曲 らうす創造

(一六八)

原 子 修

知床いぶき樽の連打

暗転

男1

「(スポットの中で) 序曲 ラウス創造」

沈黙

トンコリの樂の音

やがて

ムツクリに変わる

沈黙

風 じよじょに やがてはげしく吹く

青い光の流れ じよじょに やがて強く早く会場を洗う

ラウス岳の大おじいちゃんの声

「(壮重に重々しく) はじめに 風があつた」

ソプラノのファルセットの歌声が はじめ低く やがて高く流れる

それに合わせて 青い光の流れ じよじょに薄緑から やがて薄紅 そして真紅のほのおに変わる

ラウス岳の大おじいちゃんの声

「やがて いくつもの風の流れは はげしくぶつかりあつて 熱く燃えさかる火に変わつた」

甲高い笛の音

—交声詩らうす—

それに合わせて 真紅のほのお 重い土いろに変わる  
スクリーンにシレトコ半島の形あらわれる

ラウス岳の大おじいちゃんの声

「やがて 火は どろどろに固まつて 重い粘土のようになり 大地を そして  
シレトコ半島をつくりだした」

シンセサイザーの無機質な音楽

やがて 琴のしらべに変わり

それに合わせて 会場を流れる光 じょじょに透明な水の流れに変わる  
ラウス岳の大おじいちゃんの声

「やがて 風は 月の光よりもつめたい水となつて オホーツクの海をつくりだした」

会場いっぱいに波うつ海

男声合唱のハミング 会場に響きわたる  
ラウス岳の大おじいちゃんの声

「そして ついに 風は おのれの体を粉々にうち碎いて オジロワシやトドやサケに変え  
ラウスの海に山に ばらまいた」

スクリーンに オジロワシ トド サケの映像

女声合唱のハミング 会場に響きわたる

幼い女の子1

「(スプットの中で) じゃあ ラウス岳の大おじいちゃん」

幼い男の子1

「(スポットの中で) 人は? ラウスのまちは?」

ラウス岳の大おじいちゃんの声

「さいごに 風は おのれのすきとおった心を 人のかたちに変えて ラウスのまちをつくりだしたのじゃ」

混声合唱のハミング 会場いっぱいに響きわたる

少年1 (小5)

「(スポットの中で 詩をよむ)」

## 風

風は

季節とともに動く

春は やさしい風

やわらかく ぼくの体をつつんでくれる

夏は あたたかい風

明るく 豊かに気持ちが広がる

秋は いかつい風

はげしく 体をばらばらにされる

冬は あらい風

はださむく 心もこごえさせる

— 交声詩らうす —

風は生活もかえてしまふ

しまいに ぼくの気持ちも

季節ごとに

かえられてしまいそうだ』

若ものたちのミュージカルグループ 怒涛のようにあらわれ その詩に作曲した音楽にあわせて 歌い踊る

沈黙

ラウス岳の大おじいちゃんの声

「こうして 風は 造物主の息吹きとなつて いのちの<sup>ゆりかご</sup>揺籠としてのオホーツクの海を……」

火山の背と断崖の肩をもつシレトコ半島を創造しついに 親潮のくに “らうす” のまちが生まれて 一〇〇年……」

風の音 はげしく高まり

やがて 沈黙

第一楽章 海あけの春

知床いぶき樽（「知床の四季・春」）

暗転

男1

「(スポットの中で) 第一楽章 海あけの春」

沈黙

たくましい漁師 1

「<sup>こおり</sup>流水が でたぞお！」

たくましい漁師たち

「<sup>こおり</sup>流水が でたぞお！」

青じろい薄明の光 しだいに差しそめる

たくましい漁師 2

「らうすの海あけだぞお！」

たくましい漁師たち

「海あけだぞお！」

朝のまばゆい光 会場にみなぎる

たくましい漁師 3

「漁協の屋上に 旗があがつたぞお！」

たくましい漁師たち

「あがつたぞお！」

たくましい漁師 4

「船に エンジン ぶつかけろ！」

たくましい漁師たち

「ぶつかけろ！」

爆発するエンジン音

たくましい漁師 5

—交声詩らうす—

「出漁！」

たくましい漁師たち

「出漁！」

たくましい漁師<sup>6</sup>

「それ ホスベだあ！」

たくましい漁師たち

「ホスベだあ！」

たくさん船のエンジン音 いっせいに沖へとむかう音

スクリーンに 沖へとむかう船団

たくましい漁師<sup>7</sup>

「沖で 魚が 待つてゐるぞお！」

たくましい漁師たち

「待つてゐるぞお！」

エンジン音 韶きあい 高鳴り 沖へと消える

朝焼けの薔薇いろ 萌える

スクリーンに らうすの海の朝焼け

波の音 高く低く

海のエメラルドの光 会場にひろがる

スクリーンに らうすの海

少女1（小3）

「(スポットの中で 詩をよむ)」

しづかな海

あれでいる海

魚がいっぱいいる海

ふねがいっぱい走っている海

かもめがたくさんいる海

お父さんお母さんがはたらいている海

わたしは

海がだいすきです」

潮騒の音 高く低く

光 鈍いろに変わっていく

スクリーンに クナシリの島影

暗く遠く

少女2 (小2)

「(スポットの中で 詩をよむ)」

くなしり

うみに  
いつた  
うみは  
きれいだつた  
とつても  
天氣だつた  
なみが小さくて  
くなしりが見えた」

——交声詩らうす——

若緑の光 会場にみなぎる  
シンセサイザーの明るい音楽  
スクリーンにフキノトウやヤチブキや福寿草やスミレなどの野の花の映像  
少年2（小5）

「（スポットの中で 詩をよむ）

春

春が のんびり近づいてくる

南の方から ドシンドシン

足音をたてて 近づいてくる

過ぎ去つたあとには

春ができる

つぼみも芽も

あくびをしながら出てくる

ふきのとうも

一まい一まいきものをぬぐ

虫もみんな

あいさつをかわしながら 出てくる

あたたかい風がふくと

もう

春の世界だ」

ラウス岳の大おじいちゃんの声

「こうして らうすの冬冬があける けつしてふりむいてはくれないだれかの背中のように悲しくかげる  
クナシリの島影……冬のくらいもえ殻のように つめたく吹きよせてくる海霧……だが  
トキシラズの鮭の銀鱗がおどつて 親潮のくに “らうす” に春がくる」

若ものたちのミュージカルグループ 荒波のようにあらわれ その詩に作曲した音楽にあわせて 歌い踊る

沈黙

パツと光全開

合唱団・オーケストラ（「知床讃歌・春」）

## 第二楽章 番屋の夏

知床いぶき樽（「知床の四季・夏」）

暗転

男3

「（スポットの中） 第二楽章 番屋の夏」

沈黙

少女3（小5）

「（スポットの中で 作文をよむ）

母ちゃんまつり

母ちゃん祭りで、家のお母さんは、おどるのです。

お母さんは、とても楽しみにしているのです。私も早く見たいし、心配です。

保育園で、練習を、毎日毎日がんばってやっています。

ミニスカートをはき、ストッキングに、イヤリングに、リボンに、タンクトップと、かみに銀のをつけて、サングラスをかけて……これが衣しょうです。

(一七八)

私も、覚えて、いつしょにおどりました。

そして、翌日……いよいよ、出番です。

家のお母さんは、一番目立っていました。

キツチ、キツチとやっているし、お尻をふつたりして、え顔でおどつていました』

この間に 明るい光つよまり

朗読の終るのを合図に

母ちゃん祭りのにぎやかな音楽

母ちゃん祭りのメンバー ひとつと繰りだし

踊り 寸劇(10分間)

暗転

スクリーンに ラウス岳を映したラウス湖

少女4(中2)

「(スポットの中で 詩をよむ)

ラウス湖

おねえちゃんは

できれば

ラウス岳のような人と

いつしょになりたいと思つています

どんな大嵐が襲つてきても  
びくともせず

どんな日照りにも

けつして弱音をはかず

いつも

宇宙の中心はラウスだ  
といつてゆづらない  
ラウス岳のような人を  
こころの鏡にうつし

おねえちゃんは

死ぬまで

いつしょにくらしたいと思つています

ラウス神社の祭りばやしの音と光  
舞台に練りだすお祭りの山車とみこし

若ものたちのミュージカルグループ 祭りばやしにあわせて  
「ラウス湖」の詩に作曲した音楽にのって 歌い踊る  
さんざめく光

スクリーンにこんぶをとる舟の映像

少女5（小3）

「（スポットの中で 作文をよむ）

こんぶ

今、うちでこんぶをやっています。

六時になると、おじいちゃんが浜に出て、ふえをふきます。

一二時すぎまで、いつしきょうけんめいとつています。

おじいちゃんや、おばあちゃんや、おいにちゃんは、どうずきをはいて、お父さんが来るのをまつています。

お母さんは、お父さんのごはんをつくつてから、どうずきをはきます。

お父さんの船がかえつてくると、おにいちゃんが海にはいって、いける所までいきます。

お父さんの船をあげると、こんぶをきかいにかけてあらいます。

でつかいおけで、もう一回あらいます。

むすんだこんぶをはこんだりして、私もいつしきょうけんめいに、こんぶのてつだいをしました」

スクリーンに こんぶを陸おかにあげる映像

スクリーンに番屋の映像

少女6（小1）

「（スポットの中で 詩をよむ）

ばんやにいつたよ

きのう

おかあさんとおとうと  
三人でばんやにいつてきました  
じいちゃんと山にいつて  
うどをとつたよ」

スクリーンにべつの番屋の映像

少女7（小5）

「（スポットの中で 作文をよむ）

こんぶ番屋

私の家では、毎年七月の末になると、家族みんなでこんぶ番屋にひっこしていきます。  
私のこんぶ場での仕事の中で一番の楽しみは、こんぶ巻きです。

海の水がすごくむと、おねえちゃんたちは、どうずきをはいて、ひろいこんぶをします。

こんぶの根っこ切りは、むずかしい仕事です。

お小づかいは、いさり火祭りのために、とつておくのです」

スクリーンに、水にぬれて光るこんぶの映像

歌舞団の音楽と踊り（「ラウス昆布舞唄」）

暗転

水いろの波紋 会場に搖曳

スクリーンに ラウス岳の大きな映像

ラウス岳の大おじいちゃんの声

「わしはラウス岳……チシマ火山帯につらなるシレトコ火山群の主峰……かつて沖積世のむかし天に火柱を噴き上げたコニーデ型ドームの成層火山 標高一六六一メートルの高みから オホーツクの海を……シレトコの岬を……ラウスのまちを見守りつづけてきた 父なる山 ハイマツ……ダケカンバ……トドマツ……ミズナラの大樹海をすっぽりとまとい ヒグマ……エゾシカ……キタキツネ……シマリスや オジロワシ……オオワシ……ハシブトガラス……オオセグロカモメを内ふところに育て 峰々から無数の渓流を光の瀧のようにはとばしらせて 山すその渚によりそそうラウス人のくらしを見守つてきた わしは ラウス岳……父なる山 春のタマ風をあやし 夏の海霧をいましめてきた わしは ラウス岳……父なる山」

パツと 夏の光全開

合唱団・オーケストラ（「知床讃歌・夏」）

## 第三樂章 漁火の秋

知床いぶき樽（「知床の四季・秋」）

暗転

男4

「（スポットの中で） 第三樂章 漁火の秋」

沈黙

純金の光 めぐる

若い女1

「（スポットの中で） エトピリカのような若ものと……」

若い男1

「（べつのスポットの中で） シレトコスマレのような娘とが……」

若い女1と若い男1

「（二人 同じスポットの中に移動して 抱きあい 声をあわせて） ともに愛しあつた夏……ラウスの夏」

パツと暗転

紅葉いろの光 めぐる

壯年の女1

「（スポットの中で） 山おやじのように元気な うちのとうさんと……」

壯年の男1

「（スポットの中で） 潮騒のように心やさしい うちのかあさんが……」

壮年女の1と壮年の男1

「(同じスポット中に移動し 手をとりあい) いつしょに 汗水たらしてはたらく……秋 ラウスの秋」  
スクリーンに秋の紅葉の山の映像

少女8(小4)

「(スポットの中で 作文をよむ)

キツネ

お母さんが「おまえたち、ちょっとこい」といったので、行つてみたら、畑にキツネがいました。  
てらだのおばちゃんがきて、「キツネいるよ」といったので、私は「しつているよ」といいました」

スクリーンに チカ釣りの映像

少年3(小3)

「(スポットの中で 詩をよむ)

チカつり

グググーッ

手ごたえがあつた  
大きなチカだ

—交声詩らうす—

白いはらを出して  
ビカビカ光っている

はりからにげようと/orする  
ぼくは ひつしであげた

スクリーンに 野菊の映像

若い女2

「(スポットの中で 詩をよむ)

野菊

相泊ゆきのバスに乗りこんできた

赤銅いろのとうさん

作業服のポケットから

野菊の娘たちが

吹きこぼれるように笑いました

バスいっぱいにひろがつていく

野菊の香り

いや

バスが

その香りのなかに乗りこんだのです

香りが

相泊ゆきのバスを

野菊のさとまで乗せていくのです」

若ものたちのミュージカルグループ その詩に作曲した音楽にのつて 歌い踊る

スクリーンに 浜ではたらく家族の映像

少女9（小5）

「（スポットの中で 作文をよむ）

私のお父さん

私のお父さんは、漁師です。朝の早くから起きて、船に乗って、沖へ魚をとりに出かけて行きます。

私達は、たまに、船に乗って沖へでます。

網にかかった魚はずしを手伝います。

みんなの顔にうろこがとんで、いっぱいひつづきます。

そんなことにはまわらず、いつしうけんめいに働きます。

お母さんも働きます」

スクリーンに網あげの映像

少年4（小5）

「（スポットの中で 作文をよむ）

あみあげ

生まれて初めて、あみあげを手伝いにいきました。

ぼくはサメとオオカミウオが取れるといいなと思いました。船がとまってあみをあげました。

魚がいっぱいとれました。ソイ、カジカ、スナガレイ、ソウハチ、ナメタ、ヤスデ、オヒヨウです。  
ぼくがあみからはずしやすい魚はナメタです。

帰るとき、船の横を見たら、イルカが、船の先のほうに行くのが見えました」

スクリーンに 父の手の大きな映像

少女10（小5）

「（スポットの中で 詩をよむ）

## お父さんの手

お父さんの手は大きい

男らしい手  
ごつつい手

苦労のいっぽいつまつた手  
魚のにおいがしみついた手  
とてもくさい手

力強い手

たくましい手」

## パツと 秋の光全開

合唱団・オーケストラ (「知床讃歌・秋」)

## 黄昏の光

やがて夜の闇

スクリーンに 沖の漁火の映像

若い女3

「(スポットの中で詩をよむ)

—交声詩らうす—

漁火

燃えつきていくのは  
だれの  
いどころ

海いつぱいの夜空が  
ふりこぼしていつた

団星

水平線が  
とてもつらいたかさに  
せりおとされ

くらやみが

おのれの内部からみつけだしてくる

光

イカ釣り船は

だれの星のはるけさへと

(一九〇)

わたしを  
とりにがす」

若い女4

「(スポットの中で)

あんたが

夜の太陽のように燃える集魚燈なら……」

若い男2

「(べつのスポットの中で)

おまえは

その白熱の光に身を投げる

ゴメ」

若い女4

「(スポットの中で)

でも

わたしが

まばゆく燃えるあんたに惹かれて

海のくらがりから浮かびあがる

はずかしい鳥賊なら……」

若い男2

—交声詩らうす—

「(べつのスポットの中で)

おれは

夜明けの光にぬれたおまえを

船べりに釣りあげる

ハネゴ……」

潮騒の音

スクリーンにいつそうはげしく燃える漁火

たくましい漁師 8

「(エコーで絶叫し) 漁火まつりだぞー」

パツと明転

歌舞団の音楽と歌と踊り (『羅臼音頭』)

沈黙

ヒグマの吠え声

青い光めぐる

風吹きつのる

初雪がふりはじめる

壯年の女 2

「(スポットの中で 天をふり仰ぎ 初雪を手のひらにうけ) 雪だよ すきとおつた寒さが  
むすうの蝶になつて 舞いおりてくるよ」

風の吹きすさぶ音

壮年の男2

「(同じスポットの中で) ラウス岳から 風の谷をぬけて 天が なだれ落ちてくる」

壮年の女2

「(壮年の男2にしがみつき) とうさん 吹雪の魔の手にさらわれないように、しつかり わたしたちを抱きしめていてちょうどいいね」

壮年の男2

「(壮年の女2を抱きすくめ天を仰ぎ) 山おやじのやつめ 山ブドーやコクワの実をどっさり食べて 無事冬ごもりの穴にもぐりこめたかな」

溶暗

吹雪いつそうはげしく吠えたり

沈黙

ラウス岳の大おじいちゃんの声

「わたしはラウス岳……寒流の内懷に スケソウダラ メンメ オニコンブ バイツブをいつくしみ育てるオホーツクの母なる海を じっと見守りつづけてきた わしはラウス岳……父なる山 親潮で産ぶ湯をつかい 突風と海霧<sup>ガス</sup>と流水の試練にもめげず 荒磯をひらいて一〇〇年のまちを生きぬくラウス人を ずっと見つめつづけてきた わしはラウス岳……父なる山」

暗転

## 第四楽章 流氷の冬

冬の光を浴びて

知床いぶき樽（「知床の四季・冬」）

暗転

男5

「（スポットの中で） 第四樂章 流氷の冬」

吹雪の音と光

スクリーンに 吹雪の映像

高齢の女1

「（スポットの中で） 吹雪にもめげず まつしろい樹氷の髪をふり乱して トドマツのように立つ  
おじいちゃんと……」

高齢の男1

「（同じスポットの中で 高齢の女1と腕をくみ） トド松の枝にしつかりつかまつたシマフクロウ  
のように しばれの冬を生きぬくおばあちゃんの……」

高齢の男1と高齢の女1

「冬……ラウスの冬」

吹雪の光

スクリーンに エゾシカの映像（途中で消える）

少女11（小4）

「(スポットの中で 作文をよむ)

エゾシカ

今朝、ごはんをたべていたら、おじいちゃんが「しかだ！しかだ！」と言いました。外に出てみると、つなのりっぱなエゾシカでした。

「あれ、けいそんにいつたよ」と、おかあさんがいました。

エゾシカは、いつしようけんめいにおよいでいました。そして、船のロープにひつかかってしまいました。おじいちゃんとおかあさんが、そのロープをあげようすると、しかがあはれました。

わたしとおかあさんで、「ころさないから、がんばって！」といいました。

しかし、ロープのなかをくぐり、うすい氷の中を「ばしつ ばしつ」と、わってきました。

わたしは、「しか、もうすこしだ。がんばれ、がんばれ」といつて、田になみだがたまり、とうとう、なってしました。

やつと、しかは、りくにのぼってきました。

しかは、よろよろでした。わたしたちがいつても、にげようとは、しません。

とおりかかつたおじさんが、しかを山につれてかえりました。

わたしは、「よかつたね、しか」と、心の中でいました

この間、演技集団1が 犬に追われて海に逃げる雄じかと、それを助けるおじいちゃんとおかあさんと少女と、とおりすがりのおじさんを演ずる

スクリーンに オジロワシの映像

少女12（小5）

「(スポットの中で 作文をよむ)

おじろわし

うちの前の山には、大きな木がある。その木には、たくさんのおじろわしが、とまりにくる。

ときどき、うちの前までとんでくるときがある。

すごく大きいはね。とんがつたくちばし。

こんなすごいのが、まい日、たくさん、木にあつまる。

山にいつて、もつとちかくで、おじろわしを見てみたいです」

金属的なシンセサイザーの音

暗転

会場いっぱいに 冬の黒々の光がふりしきる

風の音つよまる

岩にくだける波の音

高齢の男2 スポット中で 沖にむかって立つ

少女13（中1）

「(べつのスポットの中で 詩をよむ)

潮騒

しけてくると

おじいちゃんは落着きません

沖で

なつかしい人たちがさわいでいる  
というのです

荒波のよせる渚にでていって  
潮騒にじつと耳をかたむけます

遠く旅だつていつた人たちの  
久しぶりの声がきこえてくる  
というのです」

さらに吹きすさぶ風

うちよせる波の音

スクリーンの空を乱舞するカモメ

カモメの鳴き声

—交声詩らうす—

若い男3

「(スポットの中で 詩をよむ)

カモメ

カモメ カモメ

冬の浜風にあおわれて  
どこまで遠く  
舞いあがる

大しけの海は

まつしろい波の牙をむき

つばさを休める水面は  
ついえ去り

カモメ カモメ カモメ

つめたい風の刃<sup>やいば</sup>に追わされて

どこまでも  
舞いあがり

空の

そのまたうえの空の  
えいえんに到りつけない  
もう一つの海へと  
まっさかさまに落ちていく

カモメ カモメ カモメ」

この間 舞踊団が 詩にあわせて 創作舞いを舞う

青い光 荒れ狂う  
吹きすさぶ風

大波のうねりの照明

岩にくだける大波の地響き  
冬の光めぐる

合唱団・オーケストラ（「知床讃歌・冬」）

ほのあたたかい光と音

(一九八)

—交声詩らうす—

壮年の男3 壮年の女3 少年5（小4）

手に手に茶碗とハシをもつて 食事の仕草で 上手から舞台を横切っていく

少年6（小4）

「(その間 スポットの中で 作文をよむ)

つけものばあさん

ばんごはんの時、お父さんがつけものを食べて、きゅうに、「このつけ物、だれつくったんだ」と言いました。  
そしたら、お母さんが「わたししかいないっしょ」と言いました。

お父さんは、「ずいぶん、うまくなつたな」と言いました。そして、「つけものばあさんじやないの」と言いました。みんなで、「アハハハハ」とわらいました

暗転

ほのあたたかい音

壮年の女4 スポットの中で タラを干す

少女14（小4）

「(べつのスポットの中で 作文をよむ)

## お母さん

私のお母さんは、いつも朝早くたらほしに行きます。私は、夜に、「あした、たらほすの、てつだつてあげるから、つれてつて」といました。

するとお母さん、「あしたは、たら、ないよ」といました。

朝おきると、お母さんは、畑で仕事をしていました。

こんな時ぐらい、体を休めてほしいなあと思います」

## ほのあたたかい音

スポットの中で 壮年の男4 壮年の女5 少女15（小5） テレビとストーブのまえで

作文の内容どおりの演技をする

少女16（小5）

「(べつのスポットの中で 作文をよむ)

## 父のすわる場所

## 「ガラガラガラ、バタン」

つかれて戸を開ける音。すぐ、漁から帰ってきた父だとわかる。

ぼうしなんか、うろこでうろこで、うろこで、もようが見えないくらいこびりついて、とれそうもない。父が着がえて茶の間に入つてくる。みんながよける。父がよこたわる。

ストーブとテレビの間の最高な場所にすわる。ここが、いつも、父のすわる場所だ。

ざぶとんを二枚持ってきてまくらにし、横たわる。そして私に「お茶」と言う。

家族以外の人がすわつたら、なんとなくはらがたつ場所だ。なぜか、父がすわると、はらが立たない。

「あたりまえだ」とみんなが思つてゐるからだ。

母が、「いくらあつた?」と聞く。父は、なにも答えない。

今日も、父は、その場所で、ざぶとんをまくらに、テレビみて、たばこをすつてゐる

### ほのあたたかい音

スポットの中で 壮年の男<sup>5</sup> 壮年の女<sup>6</sup> 少女<sup>17</sup>（小<sup>5</sup>） 少年<sup>7</sup>（中<sup>2</sup>） テーブルをかこんで 三平皿  
で三平汁をふうふう湯気を吹きながら 作文の内容にあわせて食べる

少女<sup>18</sup>（小<sup>5</sup>）

（べつのスポットの中で 作文をよむ）

### さんぺいの好きなお父さん

私のお父さんの好きな食べ物はさんぺいです。夕ごはんにさんぺいがでると、いつもどんぶりに多い時で三ばいぐらい、少ない時で二はいぐらいはたいらげます。

さんぺいを食べる時は、いつも「あー、おいし。あーおいし」「貴惠食べるか」「マー婆食べるか」「お母さん食べるか」といつてさそいます。お兄ちゃんは、「うん。食べる」と言つて、お父さんといつしょに、もくもく食べます。お母さんは、「やー。よく食べるね」と、あきれてみています。

お父さんの作ったさんぺいは、とてもおいしいです。だから、さんぺいがきらいな私でも、少しあたべるようになります

## 暗転

鈴をふるような美しい音楽

しらじらと明けそめる水平線

流水の群れの照明

たくましい漁師 9

「船ば おが 陸さ おが あげろーつ！」

たくましい漁師たち

「陸おがさ あげろーつ！」

たくましい漁師 10

「流水こおりが きたぞーつ！」

たくましい漁師たち

「きたぞーつ！」

たくましい漁師 11

「沖まで まつしろだぞお！」

たくましい漁師たち

「まつしろだぞお！」

光 しらじらとみちる

若い女

「(スポットの中で 詩をよむ)

## 流水

はるか沖あいから

たくさん的小包みがとどきました

差し出し人のいない

海路便です

光の包装紙につつまれた

さまざまな形の宅配便です

だれにあてた

季節の贈り物なのでしょう

ひらくと

すきとおつた寒さの蝶が  
いつせいにとびたつて

海峡は

ダイヤモンドのかけらでいっぱいです」

スクリーンに 流氷とたたかう漁船の映像

少年8 (小5)

「(スポットの中で 詩をよむ)

流水

流水は

海の流れにのつてやつてくる

どんどん南へ向つてやつてくる

流水がくれば魚もかかる

流水と父のたたかいがはじまる  
はげしいたたかいがはじまる

父は ひつしにたたかう

船は きずだらけだ

スクリーンに 網にかかったスケソウダラをあげる映像

少年9 (小3)

お父さんの仕事

おとつい、ぼくは、くつこおばちゃんと、浜にぎはんを、もつていきました。

ぼくのおとうさんは、休まないで、おきにいきます。すけそを、ドラムであげて、また、港にかえってきます。そして、おかあさんたちがすけそをはずします。それが終ると、おとうさんたちが、明日にそなえて、あみをたきます。

ぼくは、みんなに、「ごくろうさんと、いつてやりたいです。」

帰ろうとしたつけ、お父さんが、声をかけて、手をふつてくれました。ぼくは、はずかしかったから、手だけふつてあげました。

ぼくは、おとうさんに、「ずっと仕事をつづけてほしいです」

湯気がもうもうたちこめる

湯気の奥で 裸のたくましい漁師

12 13

14

15

温泉に入っている仕草

たくましい漁師

12

「ああ いい湯だなあ」

たくましい漁師たち

「いい湯だなあ」

たくましい漁師

13

「骨まで あつたまるよなあ」

たくましい漁師たち

「あつたまるよなあ」

たくましい漁師 14

「魂まで あつたまるよなあ」

たくましい漁師たち

「あつたまるよなあ」

たくましい漁師たち 湯気につつまれて入浴

たくましい漁師 15

「(べつのスポットの中で 詩をよむ)

### 熊の湯

さ

銭勘定のシャツボ きつぱりぬげば

天井は

大空の無限水晶

—交声詩らうす—

壁は

風の宇宙ガラス

入口も出口もすっぽりぬいで

さ

四方八方

ざぶんといくべ

地球は おふくろ

湯舟は

熱いオッパイの てんこもり

さ

世紀末にひえきつたひとりぼっち  
首まで漬けて

——骨  
ヌグマレ

——魂 アツタマレ (この二行はたくましい漁師 12  
13  
14)

はたりこくじゅう

森の木々との くつちやべり

まっぱはだかの山親爺と

背中 ながしあえ

な

文明の 冷え症たがれの

おれ」

若ものたちのミュージカルグループ その詩に作曲した音楽にのつて 歌い踊る

沈黙

風吹きおこり 吹きすぎび

吹雪の光 荒れ狂い

たくましい漁師 16

「地吹雪がくるぞお！」

たくましい漁師たち

「くるぞお！」

たくましい漁師17

「流水が うごくぞお！」

たくましい漁師たち

「うごくぞお！」

たくましい漁師18

「出漁！」

たくましい漁師たち

「出漁！」

たくましい漁師19

「流水を割つて 沖さいくぞ！」

たくましい漁師たち

「沖さ いくぞ！」

沈黙

流水の光 会場をめぐる

ラウス岳の大おじいちゃんの声

「わしはラウス岳……北半球の空にそびえたつシレトコ火山群の主<sup>ぬし</sup> 緑したたる原始の森の……可憐なシリトコスマレの花の……美しく舞うカラフトルリシジミの 父なる山 銀鱗はねちるオホーツクの母なる海とともに クリオネのように可愛い赤ちゃんをあやし トツカリのように元気な子どもと遊びたわむれ

オオワシのようにたくましい若者とゴメのよう優雅な娘の出会いを助け  
女の愛をはぐくみ 年ぶりたものたちの知恵といつくしみを祝う わしは ラウス岳……父なる山 いつま  
でも いつまでも 親潮のくに『ラウス』の繁栄を祈つていく わしは ラウス岳……父なる山』  
この間

スクリーンに 森 花 鳥 魚 そして 幼児から高齢者までの人々のくらしの映像がつぎつぎにうつる

### 終曲 親潮のくに

知床いぶき樽の連打

暗転

男 6

「(スポットの中) 終曲 親潮のくに」

沈黙

スクリーンに おばあちゃんの温顔大きくうつる

少女 19 (中1)

「(スポットの中で 詩をよむ)

三平汁

おばあちゃんの三平汁は

—交声詩らうす—

とつても あつたまります

お陽さまの味がします

お陽さまからいただいた

光のしづくを

そつと

入れてあるのだそうです」

太陽の光大爆発 大音響

純金の光 会場をめぐる

少女20（小3）

「（スポットの中で 作文をよむ）

日の出

とうだいのほうが、あかるかつたので、見たら、太陽があがつてくるところでした。

クナシリも、ほんやりと見えてきました。

まわりが、パツと明るくなりました。

まるで、赤いきれいなゆびわみたいでした。

なんだか、うれしくて、うれしくて、たまりませんでした  
純金の光 さらにはげしくめぐる

少年10（小3）

「（スポットの中で 詩をよむ）

らうす町

小さな町

海べにそつてる

長い町

魚がいっぱいとれる町

家はすぐくりっぱだ

くなしりとうが見える町

スキー場がある町

すばらしい町

ぼくの生まれた町

だから

ぼくは

らうすがすきだ」

(11111)

— 交声詩らうす —

光 虹いろになり

合唱団・オーケストラ（「知床讃歌・終章」）

沈黙

明転

風の音

幼い女の子2

「オホーツクの海と」

幼い男の子2

「シレトコの大地が」

少女21

「世界のはじまりとおわりを」

少年11

「みずみずしくとりかえあう」

若い女6

「ラウスの渚は」

若い男4

「曲りくねつた 音楽の糸です」

全員

「音楽の糸です」

壮年の女7

「一瞬一瞬 うまれてはきえていく」

壯年の男<sup>6</sup>

「琴の糸です」

全員

「琴の糸です」

高齢の女<sup>2</sup>

「その糸を めいめい じぶんなりの指で爪弾いて」

高齢の男<sup>3</sup>

「わたしたちは 生きています」

全員

「生きています」

幼い女の子<sup>3</sup>

「元気いっぱいの」

幼い女の子<sup>4</sup>

「おにいちゃんと おねえちゃんの」

全員

「波」

幼い男の子<sup>3</sup>

「力づよい」

幼い男の子<sup>4</sup>

— 交声詩らうす —

「どうさんと かあさんの」

全員

「波」

少女 22

「おさやくよくな」

少年 12

「おじいちゃんと おばあちゃんの」

全員 「波」

少女 23

「でも わたしには わかります」

少年 13

「ひとりひとりの奏でる くらしのしらべが」

若い女 7

「いつのまにか」

若い男 5

「鳥や花のしらべといつしょになつて」

壮年の女 8

「ラウスのシンフォニーを」

壮年の男 7

「織りあげていくのを」

全員

「織りあげていくのを」

潮騒の音

少女24（中2）

「（スポットの中で 詩をよむ）

ふるさと

潮騒のゆりかごで

赤ちゃんはそだちます

オオセグロカモメやトツカリの赤ちゃんといつしょに

親潮で産湯をつかい

北半球の光の乳をすい

潮風の子守唄をきいて

すくすくと

赤ちゃんはそだちます」

(一一六)

潮風の音

少年14（中2）

「（べつのスポットの中で 詩をよむ）

### 銀の笛

幼い弟は

一日じゅう

岸べの岩にすわって

沖に

じつときき耳をたてています

いつか きっと

水平線のむこうから

銀の笛の音がきこえてくる

その音といっしょに

銀いろの魚の大群が

岸べに

どつとよせてくる

その日を

じつと

待つて いるの です」

少女 25 (中3)

「(べつのスポットの中 で 詩をよむ)

### 刺し網

日向で

いつしうけんめい

刺し網をさやめるおじいちゃん

手こぎの磯舟にのつて

もう

だれも見向きもしない

海の心のかたちをした魚を  
すなどりにいくのでしょうか」

少年15（中3）

「(べつのスポットの中で 詩をよむ)

## 地球

おにいちゃんは 旅行ずきです

世界のはてまでいくのだ

といつて

東へ東へとむかい

何年かのち

出発点のラウスに到りついたのです

太陽をつかまえるのだ

といつて

西へ西へとすすみ

いつまでも沈まない太陽を追つて

やつぱり

もとのラウスに帰りついたのです

薔薇いろの光

網をあげる漁師たちの姿と声  
若ものたちのミュージカルグループ

つぎの詩を作曲し 歌い踊る

女声  
「わたしのうまれた」

男声  
「ぼくの育った」

全員  
「シレトコ」

男声  
「そびえたつ

山々の背をつらぬいて

億万年の

火の記憶がはしる」

全員  
「シレトコ」

女声  
「いくえにも

曲りくねつた

—交声詩らうす—

渚を

楽器の糸のように爪弾いて

わたしたちが

生きぬしていく

荒磯のまち

全員

「ラウス」

男声

「極寒の風に

あらがつて咲く

シレトコスミレ

エゾノツガザクラ

キバナシャクナゲ」

全員

「花々といつしょに」

女声

「朔北の光に舞う

オジロワシ

オオセグロカモメ

ハシブトガラス」

全員

「鳥たちといつしょに」

男声

「刃のよう」

研ぎすまされた水を

かいくぐる

アキアジ

スケソウダラ

女声

「原始の森を」

生きぬく

ヒグマ

エゾシカ

キタキツネ」

全員

「魚や

けものといつしょに」

男声

「海霧をはらいのけ

— 交声詩らうす —

流水を かきわけ

風と 折れあいをつけて

女声

「わたしたちが くらしていく」

全員

「ラウス」

男声

「潮騒の子守唄」

女声

「潮風のおしえ」

男声

「寒流のめぐみ」

全員

「ラウス」

女声

「チングルマの花も わたしも」

男声

「おなじ地球の中心を 咲く」

全員

「ラウス」

原 子 修

男声

「ナナカマドの木も ぼくも」

女声

「おなじ世界の中心に 立つ」

男声

「ラウス」

女声

「ラウス」

全員

「ラウス」

女声

「親潮のくに」

男声

「親潮のくに」

全員

「ラウス」

わがふるさと  
えいえんに

音楽高潮

(幕)

(1)(1)(1)

「——交声詩らうす——  
親潮のくに」

☆出 演 者

〈序曲 らうす創造〉

知床いぶき樽（連打）

男1

ラウス岳の大おじいちゃんの声

合唱団・オーケストラ

幼い女の子1

幼い男の子1

少年1（小5）

若ものたちのミュージカルグループ

〈第一楽章 海あけの春〉

知床いぶき樽（「知床の四季・春」）

男2

原 子 修

たくましい漁師

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

7 6 5 4 3 2 1

少女1（小3）

少女2（小2）

少年2（小5）

若ものたちのミュージカルグループ

ラウス岳の大おじいちゃんの声

合唱団・オーケストラ（「知床讃歌・春」）

（第二樂章 番屋の夏）

知床いぶき樽（「知床の四季・夏」）

男3

少女3（小5）

母ちゃん祭りのメンバー

(二二六)

— 交声詩らうす —

少女 4 (中2)

羅臼神社祭典のグループ

少女 5 (小3)

少女 6 (小1)

少女 7 (小5)

歌舞団 (「羅臼昆布舞唄」)

ラウス岳の大おじいちゃんの声

合唱団・オーケストラ (「知床讃歌・夏」)

〈第三樂章 漁火の秋〉

知床いぶき樽 (「知床の四季・秋」)

男 4

若い女 1

若い男 1

壮年の女 1

壮年の男 1

少女 8 (小4)

少年 3 (小3)

若い女 2

若ものたちのミュージカルグループ

少女9（小5）

少年4（小5）

少女10（小5）

合唱団・オーケストラ（「知床讃歌・秋」）

若い女3

若い男2

たくましい漁師8

歌舞団（「羅臼音頭」）

壮年の女2

壮年の男2

らうす岳の大おじいちゃんの声

〈第四楽章 流氷の冬〉

知床いぶき樽（「知床の四季・冬」）

男5

高齢の女1

高齢の男1

少女11（小4）

— 交声詩らうす —

演技団（雄ジカ、犬、おじいちゃん、おかあさん、少女、通りすがりのおじさん）

少女12（小5）

高齢の男2

少女13（中1）

若い3

舞踊団

合唱団・オーケストラ（「知床讃歌・冬」）

壮年の男3

壮年の女3

少年5（小4）

少年6（小4）

壮年の女4

少女14（小4）

壮年の男4

壮年の女5

少女15（小5）

少女16（小5）

壮年の男5

壮年の女6

少女17（小5）

少女18（小5）

# 原 子 修

(一一〇)

終曲 親潮のくに

知床いぶき樽（連打）

男6

少女19（中1）

少女20（小3）

少年10（小3）

合唱団・オーケストラ（「知床讃歌・終章」）

幼い女の子2

幼い男の子2

少女21

少年11

若い女6

若い男4

壮年の女7

壮年の男6

高齢の女2

高齢の男3

幼い女の子3

幼い女の子4

原 子 修

幼い男の子	3
幼い男の子	4
少女 22	
少年 12	
少女 23	
少年 13	
若い女 7	
若い男 5	
壮年 8	
壮年 7	
少女 24 (中2)	
少年 14 (中2)	
少女 25 (中3)	
少年 15 (中3)	

若ものたちのミュージカルグループ

(111111)